第1章　白　鳥

本書は白鳥から始めたいと思う。白鳥を最初にする理由はいくつかあるが、それはこのあとに記すところから知られると思われる。

1　三人のキュクノス

一般に、神話にはさまざまな物象、生物の生態や人間の慣習などについてその起源を説明する物語が数多く見られる。実際、天地創造や国生みの神話といったものも、広い意味ではそうした「縁起譚」に属するとすれば、神話のほとんどはなんらかの形で「縁起」に関わっている。この「縁起譚」の一形態として、ギリシア神話には、人間が姿を変じて、つまり「変身」によって起源をなしたという物語が多数ある。本書で取り上げるのも、多くがこうした人間が鳥に姿を変える物語であり、最初に取り上げる白鳥についてはそれらが複数ある。そこでは、「白鳥」を表すギリシア語はキュクノスであるから、キュクノスという名の王や英雄や少年が白鳥に変身した次第が語られている。

1　キュクノス(1)――パエトーンに心を寄せたリグリアの王

パエトーンの名は誰しも一度は聞いたことがあろう。太陽神ヘーリオスの息子であるパエトーンは、父からどんな頼みでもかなえてやると約束されたとき、太陽の馬車を操らせてくれるように求めた。父にはその結果が予見できたが、約束を破ることはできず、パエトーンを馬車に乗せた。しかし、馬車は動き出すや、すぐに暴走して世界を炎熱で焼き滅ぼしそうになったため、ゼウスが雷電を投げつけて馬車を打ち落とした。パエトーンの焼け焦げた体は、イタリア半島の付け根を西から東に流れるエーリダノス川（現ポー川）に落ちたという。彼の死を両親はもちろん、ヘーリアデス（ヘーリオスの娘たち）と呼ばれる姉妹たちも深く嘆き悲しみ、その悲嘆は彼女らをポプラの木に変身させるほどだったが、オウィディウスの語るところでは、

この不思議な出来事にステネロスの子キュクノスも居合わせた。この者はパエトーンと母方の血筋で結ばれていたが、それ以上に心を近く寄せ合っていたので、王領――彼はリグリアの諸邦と大きな町々を治めていた――をあとにして緑なす川岸とエーリダノスの流れ、それに、姉妹によって木々の増えた森を悲嘆で満たした。と、そのとき、勇士の声はか細くなり、髪の毛に白い羽毛が取って代わる。首は胸から長く伸び、足の指は隙間が膜でつながれて赤くなる。翼が脇を覆い、口は尖りのない嘴となる。キュクノスは新たな鳥となったが、空とユッピテル［＝天］にその身を託さない。神が不当に投じた雷電を忘れなかったからだ。沼や広い湖を求め、火を嫌う。住まいには川辺を選ぶ。炎と敵対しているからだ。

（『変身物語』二・三六七―三八〇）

このキュクノスには、ウェルギリウスによると、子孫がおり、父のしるしを掲げて出陣したという。

少数の兵にともなわれたクパーウォーよ、そなたの頭頂からは白鳥の羽根飾りが立ち、父の姿を誇示する。愛の神アモルよ、あなたがたが悪いのだ、人の伝えでは、愛したパエトーンを嘆くあまりにキュクノスは、ポプラの木陰、姉妹の葉陰で歌を歌い、ムーサを悲しい愛の慰めとしているあいだに白髪の老人のように柔らかな羽根を生やして大地を去り、声上げて星を目指したのだから。

（『アエネーイス』一〇・一八六―一九三）

また、このキュクノスが変じた白鳥が星座になったとの伝承もあり、そのことをクラウディアーヌスは次のように歌っている。

太陽神は自分の悲嘆を表す物語を天界に刻んだ。姿を変えて翼を生やした老人と木の葉を生やした姉妹、そして、瀕死の息子の傷を洗った川だ。御者座は寒冷の気候帯にとどまり、兄弟の進むあとをヒュアデス星団の姉妹が従い、供をなすキュクノス［白鳥座］の広げた翼は天の川にかかっている。エーリダノスは川筋をあちらこちらとうねらせつつ南の澄み渡る蒼空を潤し、剣も恐ろしげなオリオン座の下へと流れをもぐらす。（『ホノーリウス第六次執政官職をたたえる』一六八―一七七）

さて、西暦二世紀に活躍した散文作家ルーキアーノスは、『琥珀または白鳥について』と題する短い一文で彼自身がエーリダノス川の岸辺を訪れたときのことを記している。そこには、ヘーリアデスが変身したポプラが生え、キュクノスが変身した白鳥が棲むと言われているからである。しかも、ヘーリアデスはポプラとなっても涙を流し続け、その滴は琥珀となるということなので、ルーキアーノスはたいへんな期待を抱きながら川を遡上してポプラの木をさがしてみたが、いっこうに見当たらない。それど

ころか、土地の人はパエトーンの名も知らないので、ヘーリアデスとなると、乗った船の船頭たちから、それは嘘八百だ、そんなことがあるなら、はした金で川を上ったりせず、ポプラの涙を集めて金持ちになっている、と一蹴されてしまう。これだけで相当落ち込んだものの、ルーキアーノスは美しい声で歌う白鳥のことを尋ねてみた。すると、白鳥はときどき見るが、鳴き声はとても聞いて心地よいものではなく、カラスなどのほうがずっとましなくらいだ、と大笑いされてしまったという。

この話をルーキアーノスは講演かなにかの枕にしたらしく、これに続けて、こういうふうに期待が大きすぎると裏切られることが多いので、集まったみなさんも決して自分の話にたいそうなものを求めてはいけない、と断りを入れている。

ルーキアーノスは機知と諷刺とユーモアに富むことで知られ、ここにもその一端がよく表れていると思われるが、それと同時に、ここではとくに古代人の神話伝承に対する接し方が多少とも窺われるようで興味深い。作者であり講演をしているルーキアーノスは知識人であり、講演を聴きにやってきた聴衆は知識への嗜好ないし志向を有する人々である一方で、エーリダノス川の船頭たちはパエトーンの名前も知らない無骨な輩と言ってよいであろう。ところが、やや不純な動機からとはいえ神話ゆかりの地を訪ねる学者ルーキアーノスの試みは、無学な船頭らによってまったく無益なものであることを証明されてしまった。そこで、ここには、神話には多かれ少なかれついてまわる荒唐無稽さを材料にしながら、それを知識によって信じている学者と、経験によってただちに絵空事と判断できる無学者という対照の上に皮肉が醸し出されていることが認められる。しかしこのことは、パエトーンやヘーリアデス、そしてキュクノスなど伝承そのものを荒唐無稽さゆえに無意味であるとして切り捨てたり、それらを語り伝える人々を揶揄したりするものではない。というのは、少なくとも、これらの伝承は聴衆を前に現に語

られているのであり、講演に過剰な期待を抱かないようにと注意する目的には十二分に役立っているからである。ここには、神話伝承への心得るべき接し方が窺えるように思われる。すなわち、一つに、自分自身の目や耳あるいは足を使って確かめる、二つに、心情的に深い関わりを意識しながら同時に合理的に突き放して見る、三つ目には、当面する状況に適合させる話し方を用いる、ということである。

2　キュクノス(2)――傲慢な少年

二人目のキュクノスの物語を知る人はそれほど多くはないと思われる。ニーカンドロス『変身譚』第三巻、およびアレウス『キュクノス』に語られていたとされ、その梗概がアントーニーヌス・リーベラーリスに伝えられている。それによれば、キュクノスはアポッローン神を父として生まれ、美男であったが、性格は曲がっていた。美しさから多くの求愛者があったが、彼らを見下して相手にしなかったため、慕うのはピュリオスという若者一人になった。ところが、このピュリオスにキュクノスは難題を課す。ピュリオスは、一つ目の、巨大なライオンを殺す命令は酒で酔わせる策略を用いて、二つ目の、巨大な禿げ鷹を生け捕りにする命令は、おとりにするウサギが手に入った偶然に機転を加味して、それぞれなんとかやり遂げたが、キュクノスの理不尽はそれで終わらなかった。

すると、三つ目の、なおいっそう困難な試練が命じられた。すなわち、一頭の牡牛を群れの中から素手で捕まえてゼウスの祭壇まで連れて行け、との命令であった。ピュリオスは、命令を果たすにはどうすればよいか困り果てて、ヘーラクレースの援助を祈願した。すると、祈願に応えて二頭の牡牛が現れた。これらは一頭の牝牛のまわりを狂ったように走り、互いに角をぶつけ合って大地

に倒れた。ピュリオスは、二頭がぐったりしたところで、一頭の脚をつかんで祭壇まで持ち帰ったが、ヘーラクレースの意志により少年キュクノスの命令は無視した。キュクノスは、思いがけずひどい侮辱を受けたために気力を失い、コーノーペーという名の湖に身を投げて姿を消した。彼が死んだあとを追って、母テュリエーもまた同じ湖に身を投げた。二人はともにアポッローンの意志により湖に棲む鳥になった。

二人が姿を消したあと、湖は名前を変えて、キュクネイエーと呼ばれた。そこでは収穫の時期にたくさんの白鳥が姿を見せ、近くにはピュリオスの墓もある。　（『変身物語集』一二・七―九）

いかにも奇妙で、スケールも小さく、心に響くところも少ない話に聞こえるが、こうした珍妙な奇譚、それも変身のモチーフを含んで、物事の縁起をなす物語がヘレニズム時代には好まれ、それらを集めた神話の集成が多く編まれた。[2]

さて、この話では、内容だけでなく、その結構にもすっきりしていないところがある。まず、白鳥の縁起譚として、キュクノスについてはよく分かるが、母親まで白鳥になったことは余計に映るうえに、縁起の焦点は白鳥よりもむしろ、キュクノスの名にちなむ湖に当てられているように見える。加えて、母子は神の意志によって白鳥に変身したのであるから、変身は救いであって、白鳥となって新たな命を得たのではないかと考えたくなるが、二人は死んだとされている。これらのことを見過ごせなかったのか、オウィディウスはそのような湖が最初からあったのではなく、キュクノスが身を投げたのは谷底としたうえで、そのあとの次第を次のように語っている。

誰もが彼は死んだと思ったが、白鳥となって雪のように白い翼で宙に浮いていた。だが、母親の

ヒュリエーは、彼が救われたことを知らず、泣き続ける涙とともに体が溶け出し、自分の名前をとどめる湖となった。

（『変身物語』七・三七八―三八一）

話の運びの点でこちらのほうが整っていることは明らかと思われる。とはいえ、湖を作るほどに涙を流すにはどれほど泣いたのだろうか、そのうえ、体が溶け出すなんて特殊効果の映画の一場面のようだ、といったことを考えると、荒唐無稽さでもこちらが数段まさっていると言えるかもしれない。

3　キュクノス(3)――不死身の英雄

三番目のキュクノスはトロイアの英雄であり、ギリシア軍中最強の勇士アキッレウスによって討ち取られた。テオクリトスの古注[3]に記されるところでは、

キュクノスはポセイドーンとカリュケーの子であり、アキッレウスによって殺された。生まれたときから肌が白かった、とヘッラニコスは言っている。それゆえにテオクリトスも彼を女のようだと言っている。ヘーシオドスは彼の頭が白かったと言っている。それゆえにそのような名前をつけられた。

（古注テオクリトス、一六・四九）

とあり、白鳥とのつながりが「白さ」に見いだされているが、それが肌の色にせよ、髪の毛の色にせよ、あまり勇壮な印象は受けない。ところが、このキュクノスが不死身であったとオウィディウスは語り、戦場でアキッレウスはキュクノスを見つけて槍を投げつけるが、それはキュクノスの体に当たってもなんらの傷も与えることなくはねかえされたという。不思議に思うアキッレウスにキュクノスは言った。

これらを見るがいい。茶色の馬のたてがみを前立てにした兜も、左手に提げた窪みある盾も、わが身を助けるものではない。それらはただ飾りのためにある。軍神マルスもこの同じ目的からいつも武具をつける。脱ぎ捨ててもよいのだ、こんな体を被うためのものは。それでも私は戦場を去るとき無傷でいるだろう。それだけのことがあるのだ、ネーレウスの娘ではなく、ネーレウスやその娘らや海全体を支配する神を親とすることは。[4]

（『変身物語』一二・八八―九四）

彼はこのように父であるポセイドーン神から授かった体を誇り、武具で身を守ることすらしない。この相手に対して、アキッレウスは何度も投じた槍が無益に終わったのち、剣で斬りかかるが、この切っ先もキュクノスの体に当たって曲がってしまう。そこでついに、

振り上げた盾で正面から三度四度と勇士の顔へ、また、剣の柄でこめかみへと打ちかかり、相手が後ろへ退くところを追いつめる。慌てるほどに圧倒し、驚愕した敵に息つく間も与えない。怯えに襲われたキュクノスの目の前には闇がちらつき、後退しようとして向きを転じた足を野原の真ん中の石にとられた。石の上へ仰向けになって倒れたキュクノスをアキッレウスは強力で振り回すや地面に打ちつけた。それから、盾と固い膝とで胸を押さえながら兜の緒を引けば、緒は顎の下に食い込んで喉を締め上げ、息の通り道を塞いで命を奪った。だが、打ち負かした敵の武具を剥ぎ取ろうとして、アキッレウスは武具だけしか残っていないのを目にする。体は海の神が白い鳥に変えてしまった。鳥の名はさっきまでキュクノスのものであった名である。（同一二・一三二―一四五）

ここには「洗練されたドタバタ」とでも呼びたいような乾いた滑稽さがある。あるいは、映画の創成期

にバスター・キートンやマルクス兄弟といった一種の天才が確立したスラップスティック（ドタバタ芝居）という様式に似たものがある。いずれにしても、ギリシア軍中随一の英雄であるアキッレウスに威厳ある勇姿を期待した読者は見事に裏切られ、キュクノスの消失に呆気にとられるアキッレウスの様子を思い浮かべながら、アキッレウスに劣らぬ大きな驚きを感じたに違いない。

2　ゼウスとレーダー

ギリシア神話には、神々が動物その他に変身して美しい女性に近づき、交わりを結ぶという物語が多く見られる。その一つとしてよく知られたものに、ゼウスとレーダーの物語がある。レーダーはアイトーリアの王テスティオスの娘で、スパルタ王テュンダレオスと結ばれたが、神とのあいだにも子供をもうけることになる。これをヒュギーヌスは次のように要約している。

ユッピテル［ゼウス］は、白鳥に姿を変えて、テスティオスの娘レーダーをエウロータース川［スパルタを流れる川］のほとりでものにした。レーダーは、神からポリュデウケースとヘレネーを、テュンダレオスからカストールとクリュタイムネーストラーを産んだ。（『神話伝説集』七七）

こうしたゼウスの浮気の物語では、相手の女性に対して、ゼウスの正妻であるヘーラー女神が嫉妬心から過酷な仕打ちを加えるというのが一つのパターンとなっている。たとえばカッリストーは、狩猟を司る処女神アルテミスの供をして山野に獲物を追うニンフであったが、ゼウスの子を身籠もったために処女神の取り巻きから外されたうえ、ヘーラーによって熊の姿に変えられてしまった。また、テーバイ王カドモスの娘セメレーとゼウスが関係をもっていることを知ったヘーラーは、一計を案じて、老婆の姿

でセメレーの前に現れた。彼女の相手がゼウスであることを確かめるために、ヘーラーを抱くときと同じ姿で彼女を訪れるようゼウスに頼め、と言葉巧みに説き伏せ、その頼みがゼウスに聞き入れられた結果、雷電とともに現れたゼウスによってセメレーは焼け死ぬこととなった。[5]

こうしたパターンの物語に対して、レーダーの場合には、レーダー本人について語られるところは少なく、ゼウスの化身である白鳥の相手として、有名な物語を残すことになる子供たちを産んだ母親として、脇役を演じるのみである。

白鳥座の縁起として、すでにパエトーンを愛したリグリア王キュクノスについて触れたが、ここでのゼウスの化身が星座となったとする伝承もある。たとえば、ゲルマニクスは『アラーテア』[6]の中で、

> 向かいに見える鳥は、かつてポイボス［・アポッローン］に仕えた白鳥か、さもなくば、レーダーの奥の間に滑り込んだ不義なす鳥で、この化身がゼウスの密事に被いをかけた。
>
> （『アラーテア』二七五―二七七）

と歌っている。ちなみに、「アポッローンに仕えた白鳥」について、古注は「白鳥が星座となったのは、声音（こわね）のよいことからアポッローンをたたえてのこと」という説を記しているが、「白鳥の歌」については次節で述べる。

しかし、このような白鳥座の縁起は実質的な物語をともなうわけではない。それよりも大きいのは、レーダーから生まれた子供たちそれぞれが神話の中で果たす重要な役割である。まず、ポリュデウケースとカストールは、双子の兄弟としてディオスクーロイとも呼ばれ、騎馬と拳闘の名手としてアルゴー船の遠征やカリュドーンの猪狩り[7]にも参加、この世での生を終えたのちは双子座となる一方、とりわけ

船乗りに御利益のある神格として信仰の対象とされた。

他方、クリュタイムネーストラーとヘレネーの姉妹は、それぞれアガメムノーンとメネラーオスの兄弟に嫁ぐことで、トロイア戦争の発端と結末に深く関わる。トロイア戦争の原因はヘレネーにあるとされる。トロイアの皇子パリスがメネラーオスのもとからヘレネーを奪って駆け落ちしたため、彼女を奪還すべくアガメムノーンを総大将としてギリシア中の英雄が結束し、トロイアへ遠征したことから戦争が始まったからである。ただ、パリスとヘレネーの駆け落ちについては、美と恋の女神アプロディーテーに責任がある。というのも、いわゆる「パリスの審判」と呼ばれる物語が駆け落ちの前提とされているからである。ヘーラー、アテーネー、アプロディーテーの三女神はこの中で誰がもっとも美しいかをめぐって競い、その判定者としてパリスを選んだが、三女神それぞれが自分に軍配を上げてくれたときの褒美を約束した。ヘーラーやアテーネーの示した王権や戦争での誉れよりも、パリスはアプロディーテーの約束した絶世の美女を選んだ。それが、すでにそのときメネラーオスの妻であったヘレネーであったというわけである。トロイア戦争については、ギリシア遠征軍の組織と船出、ヘレネー返還交渉の決裂から戦争の開始、十年間の戦闘と英雄たちの活躍、トロイア陥落と敗者の悲劇、ギリシアの将兵の帰国談と、それぞれの段階においてさまざまな挿話があるが、ここでは詳しく触れる余裕がない。いみじくも、ホラーティウスは、すぐれた詩人というものは、

トロイア戦争を双子の卵から始めることをせず、つねに結末へと急ぎ、それがあたかも聴衆の周知のことのように事件の核心へと導く。

（『詩論』一四七―一四九）

と教えているので、筆者は詩人ではないが、「双子の卵」の結末へ話を急ぐことにする。クリュタイム

ネーストラーは、ヘレネーと双子ではあっても神の血を受け継がなかったため、絶世の美女と呼ばれることはなかったが、夫のほかに愛人を作ったことではヘレネーと似ていた。アガメムノーンが留守のあいだに情を深めたアイギストスと謀って、トロイアから凱旋した夫を彼女はその日のうちに殺してしまう。そして、この毒婦も父の仇を討とうとした実の娘と息子に殺され、いわゆるアトレウス家の呪いによる流血の連鎖を締め括ることになる。

他方、美人はやはり得をするものなのか、ヘレネーはメネラーオスと縒りを戻して一緒にスパルタへ帰ったというのが、もっとも普通に語られるところである。こうして夫を裏切り、世界を二分するような戦争を引き起こした罪が赦されたというだけでもとんでもないことに思われるが、それをさらに進めて、そもそもパリスとともにトロイアへ行ったのは神が作ったヘレネーの似姿で、本人はずっとエジプトに匿われていたとして、エウリーピデースは『ヘレネー』という悲劇を創作した。それはヘレネーの独白で幕を開けるが、その冒頭に、

> 伝わる話によれば、ゼウスが私の母レーダーのところへ飛んできたとき、白鳥の姿を取っていたとのこと。神は策略により添い寝を遂げた、鷲の追跡を逃れるふりをした、この話が確かなら、そういうことです。
>
> （『ヘレネー』一七―二一）

と語られる。神の化身である白鳥の胤であることが確かなら、その似姿が世界を躍らせていたとして何を驚くことがあろうか。この世の中には想像を絶するどんな驚くべきことでも起こりうる。そうであるとすれば、「双子の卵」から始まった物語に詩人たちがどれほど驚くべき展開を与え、どれほど不思議な結末へ辿り着かせたとしても、それに接した私たちは、まず大いに驚いたとしても、決してこれを中

身のない虚構としてのみ片づけてはならない。そのような助言をヘレネーの科白は与えているようにも聞こえる。ただ、もちろん、アリストテレースも言うように[8]、「もっともらしく見せる」工夫が詩人にはつねに求められることは言うまでもない。

3　白鳥の歌

哲学者ソークラテースは前三九九年、青年たちを堕落させたとして死刑に処せられたが、死を前にして彼は実に幸福そうであったという。それはソークラテースが魂の不滅を信じていたからで、そのことについて刑死の日の朝に弟子たちと議論した。議論の次第をプラトーンは『パイドーン』という作品に著した。その中でソークラテースは自分の立場を白鳥と比べて、次のように語る。

> 白鳥たちはもう死なねばならないと感じると、それ以前にも歌ってはいたが、とりわけてこのとき最高の歌を歌う。嬉しいからだ。これから神のもとへ旅立つのであり、白鳥たちは神の下僕なのだから。ところが人間たちは、自分が死を恐れるために白鳥たちについても嘘をつき、白鳥たちは死を嘆き、苦痛ゆえの歌声を発すると言う。彼らは考えないのだ、どんな鳥でも、歌うのは決して空腹や寒さやその他の苦しみに喘いでいるときではないことを。［中略］私が見るところ、白鳥たちも苦しくて歌うのではない。私が思うに、白鳥たちはアポッローン神の鳥であり、予言の術を心得ているから、ハデース［冥界］にある善きことを予知して歌い、その最期の日の喜びはそれ以前とは違う特別なものになるのだ。
>
> （『パイドーン』八四E―八五B）

白鳥は死ぬ前にもっとも美しく歌う。しかるに、歌うのは楽しいときだ。ゆえに、白鳥は死後の世界に

善きことを予感している。この予感は、白鳥が予言の神アポッローン神に仕える鳥であることから、きわめて確かだ。こうソークラテースは自説の補強のために語るのだが、この論拠の有効性はやはり、白鳥が歌うのは楽しいからか、それとも苦痛ゆえか、というところにある。

このことを確証するのは難しいであろうが、ソークラテースも認めるように、一般には、苦痛ゆえ、と信じられていた。すでに紹介した、パエトーンの死を嘆きながら白鳥に変身したキュクノスも、この表象と合致する。実際、ヒュギーヌスは「リグリアの王キュクノスは、パエトーンの親戚であったが、近親者の死を嘆くあいだに白鳥に姿を変えた。白鳥も死の間際に嘆きの歌を歌う」(『神話伝説集』一五四・五)と記している。また、この悲痛なイメージはきわめて強く心に訴えかけたので、詩人たちはよく比喩に用いた。たとえば、ロドスのアポッローニオスは、

娘らは一つに集まり、アイエーテースの娘[メーディア]のそばで嘆いた。[中略]あたかも、美しく流れるパクトーロス渓谷の懸崖で白鳥たちがその歌声を奏でると、そのまわりで露に濡れた草原も川の美しい流れも響くときのよう。

(『アルゴナウティカ』四・一二九六―一二九七、一三〇〇―一三〇二)

と語る。場面は、アルゴー船が帰還を目指す放浪の途次にアフリカ北岸、船の難所として知られるシュルティスの砂州に閉じ込められてしまい、英雄たちもメーディアもその侍女らも逃れるすべがなく、ただじっと死を待つしかない状況に置かれたときである。他方、オウィディウスには、

さながら、運命に召されようとして湿地の草の上に身を横たえ、マイアンドロスの川辺で歌声を

響かせる白鳥のよう。

（『名高き女たちの手紙』七・一―二）

という詩句がある。[9] 言葉の主はカルターゴーの女王ディードーで、自分を捨てたトロイアの英雄アエネーアースを恨みつつ、これから自害しようとしている。引用は、その薄情な男に宛てて書き残す手紙の冒頭で、ディードーが死を目前にした白鳥に自分をなぞらえている。

とはいえ、白鳥の歌がむしろ喜びを表すのに用いられた例もある。カッリマコスは、

すると、神の歌い手たる白鳥たちが、歌いながら、マイオニアのパクトーロス川をあとにして、七度、デーロス島のまわりを旋回した。お産に合わせて歌ってくれたのだ、ムーサの鳥たち、翼ある種族のうちでもっとも歌声よきものたちが。このために、御子がそののち竪琴に張った弦の数は、白鳥たちが陣痛に際して歌った歌の数と同じ。まだ八度目が歌われぬうちに御子が飛び出すや、デーロス島のニンフたち、由緒ある川より生まれたニンフらが、遠くまで届く声でエイレイテュイアの聖なる歌を歌った。と、すぐにも青銅の天空が遠く鳴り響くこだまを返し、ヘーラーも怒ることはなかった。憤怒をゼウスが取り去っていたからだ。

（『讃歌』四・二四九―二五九）

と歌っている。女神レートーは、ゼウス神の胤を宿して、アポッローンとアルテミスという双子の兄妹神を産むことになるが、その前に、ゼウスの后ヘーラーに憎まれ、お産の場所を見つけられずにあてどなく放浪することになった。このとき、場所を提供したのがデーロス島だとされている。引用は、ついにヘーラーの怒りも解けて、めでたくレートーがお産をした場面で、「御子」はアポッローン、エイレイテュイアはお産を司る女神である。そこで、白鳥たちは美しい歌声でお産を祝福し、陣痛の苦しみを

和らげるとともに、アポッローン神が奏でることになる竪琴の縁起をなしている。プラトーンではアポッローン神に仕える身であった白鳥たちがここでは「ムーサの鳥たち」とされ、予言に関わるよりもむしろ、詩歌の源泉のように表現されている。まるで音楽の神アポッローンに霊感を与えたかのような印象を与えているのはカッリマコスの機知によるものかもしれないが、いずれにしても、白鳥の歌が神々しい天上的な歌声とその喜ばしい響きを象徴していることは、間違いない。

そこで、ウェルギリウスのような謙虚な詩人は、

私が思うに、私の歌はまだウァリウスやキンナ[10]にふさわしいものではなく、響きのよい白鳥にまじって鵞鳥が騒いでいるようなものだ。

（『牧歌』九・三五―三六）

と言って自分の力量を卑下したが、ホラーティウスとなると、自分が白鳥に変身すると歌うことで、詩人としての自負を示した。

私が身を任すのは、使い古しでもなく、薄っぺらでもない翼。澄明な大気を突き抜ける二重の姿の歌人となり、もはや地上にはとどまらぬ。人の嫉妬を見下して都を辞する。私は、貧しい両親の血筋ではあっても、親愛なるマエケーナースよ、あなたに伺候する身ではあっても、決して滅びはしない。冥界の川ステュクスの波に絡め取られはしない。もうすでに向こう脛を包み始めているのだ、ざらざらした鳥肌が。頭からも私の姿は白い鳥に変わり、生え出る軽やかな羽毛が指と肩を覆う。いまやダイダロスの子イーカロスよりも名を高め、私は訪ねるだろう、嘆きに満ちたボスポロス海峡の両岸を、ガエトゥーリアなるシュルティスを、ヒュペルボレオイ人の野を歌声高らかに翼

に乗って。私のことは、コルキス人にも、マルシー人の部隊も怖くはないと嘯くダーキア人にも、最果ての地のゲローニー人にも知られよう。私のことは、素養のあるヒベーリア人も、ロダヌス川の水を飲む者も、学ぶだろう。遺骸を運ばぬ葬儀には無用だ、挽歌も、見苦しい嘆きも、哀泣も。慟哭を抑えよ。墓前に余計な供物を控えよ。

（『カルミナ』二・二〇）

ここで表現されているのは、すぐれた詩歌が詩人にもたらす名声と、そうして広く永く歌い継がれることによって獲得される不死性であり、白鳥はそのような存在の象徴である。

さて、白鳥に限ってみても、これまで見てきた中に、パエトーンの死を悼むキュクノスの「悲嘆」、傲慢なキュクノスの「罪と罰」、その「救い」、アキッレウスと戦った「戦士」キュクノス、「神に仕える鳥」として「予言」や「魅力的な詩歌」など、ギリシア神話を彩るさまざまなモチーフが現れていた。次には、これらのモチーフそれぞれに、鳥にまつわる神話を取り上げてゆくことにする。

［注］

（1）イタリア半島付け根の西側沿岸地域。

（2）第Ⅱ部第2章第3節6の「神話の集成」の項を参照。

（3）第Ⅱ部第2章第3節5の「古注」の項を参照。

（4）アキッレウスの母親テティスは海の女神で海神ネーレウスを父とするが、キュクノスの父ポセイドーンは海の神格の最高位にあることを踏まえた言及。

（5）そのほか、よく知られたものに、情事の現場を隠すために牛に姿を変えられたイーオー（第Ⅰ部第2章第2節「アルゴスと孔雀」参照）、ゼウスの化けた牡牛にさらわれ、フェニキアからクレータへ連れ去られたエウローペーの物語などがある。

(6) アラートスの教訓叙事詩『天象譜』をラテン語訳したという体裁を取るが、引用部分に相当するくだりはアラートスの古注に現れる一方で、アラートスそのものには見られず、また、アラートスは白鳥座について、一貫して「鳥」と表現している。

(7) 第I部第4章第2節「メレアグリデス」参照。

(8) アリストテレース『詩学』一四六〇a。

(9) オウィディウスでは、このほか、『祭暦』二・一〇九―一一〇、『悲しみの歌』五・一・一一―一二。

(10) ウァリウスとキンナはともに、当時名を馳せた叙事詩人。